

2023 ズバリ! 的中



古文

上智大学

本文と問われている箇所が一致

入試問題

2月3日実施 TEAP利用方式
二 B、C 問六、八

河合塾

大学受験科 基礎シリーズ
完全習得タイム古文
第六回〔1〕問三、四

二 次のA~Cは「江戸がたり」の文章で、DとEはCに関連する作品である。これを読んで後の問に答えよ。

A 如月の二十日余りの月とともに都を出ではれば、何となく捨て果てし住みかながら、またと思ふべき世のならひかと思ふより、袖の涙も今さら、「宿る月さへ滞るるがほにや」とまておぼゆるに、我ながら心弱くおぼえつつ、逢坂の関と聞けば、「宮も難屋も果てしなく」ことがめ過くしけぬ丸の住みかも跡だにもなく、関の清水に宿るわが面影は、出で立つ足元りうち始め、ならはぬ旅の装ひいとあはれにて、やすらはるるに、いと盛りと見る桜のただ一木あるも、これへ見捨てたときに、田舎人と見ゆるが馬の上四、五人、きたなげならぬが、またこの花のもとにやすらふも、同じ心にとおぼえて、行く人の心をとむる桜かな花や関守逢坂の山など思ひつづけて、鏡の宿といふ所にも着きぬ。

B やうやう日数経るほどに、美濃国赤坂の宿といふ所に着きぬ。ならはぬ旅の日数もさすが重なれば、苦しくもわびしければ、これに今日は留まりぬるに、宿の主に着き遊女姉妹あり。琴、琵琶など弾きて情けあるさまなれば、昔思ひ出でらる心地して、九献など取らせて、遊はするに、二人ある遊女の姉とおぼしき、いみじく物思ふさまにて、琵琶の撥にて紛らかせども、涙がちなるも、身のたくひにおぼえて目留まるに、これもまた墨染の色にはあらぬ袖の涙をあやしく思ひけるにや。盃振えたる小折敷に書きてさしおこせたる。

X 思ひ立つ心は何の色ぞとも富士の煙の末ぞゆかしき

Y 思はずに、情けある心地して、

Z 富士の嶺は恋を駿河の山なれば思ひありとぞ煙立つらむ

〔1〕 読解編
次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

やうやう日数経るほどに、美濃の国赤坂の宿といふ所に着きぬ。ならはぬ旅の日数もさすが重なれば、苦しくもわびしければ、これに今日はとどまりぬるに、宿のあるじに、若き遊女姉妹あり。琴・琵琶など弾きて情けあるさまなれば、昔思ひ出でらる心地して、九献など取らせて遊はするに、二人ある遊女の姉とおぼしき、いみじく物思ふさまにて、琵琶の撥にて紛らかせども、涙がちなるも、身のたくひにおぼえて目どじまるに、これもまた、墨染の色にはあらぬ袖の涙をあやしく思ひけるにや、盃振えたる小折敷に書きてさしおこせたる。

A 思ひ立つ心は何の色ぞとも富士のけぶりの末ぞゆかしき

B 思はずに、情ある心地して、

C 富士の嶺は恋をするが山なれば思ひありとぞけぶり立つらんなれぬる名残はこれまでも引き捨てがたき心地しながら、さのみあるべきならねば、また立ち出でぬ。

D 八橋といふ所に着きたれども、「水行く川」もなし。橋も見えぬさへ、友もなき心地して、

重要語句
○ やうやう
○ ほど
○ ならふ
○ さすが
○ わびし
○ 情
○ 遊ぶ
○ おぼし
○ いみじ
○ おほゆ
○ 墨染
○ あやし
○ おこす
○ ゆかし
○ いと
○ 思はずなり
○ なる
○ さのみ
○ なほ

我はなほ蜘蛛手に物を思へどもその八橋は^①跡だにもなし

(「とはすがたり」巻四による)

(注) ○美濃の国赤坂の宿：今の岐阜県大垣市赤坂町。

○九献：酒盃。

○墨染：僧衣。作者は尼妾である。

○小折敷：小さな折敷(檜の片木を折りまげて縁を作った角盆)。

○八橋：今の愛知県知立市八橋町。「伊勢物語」九段「東下り」に、「もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国、八橋といふところにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける」とある。

○蜘蛛手に：(蜘蛛の足が八方に出ているように) あれこれと。

問一 傍線部①～③を口語訳せよ。

①
②
③

馴れぬるなごりは、これまでも引き捨てがたき心地しながら、さのみあるべきならねば、また立ち出でぬ。

八橋といふ所に着きたれども、水ゆく川もなし。橋も見えぬさへ、友もなき心地して、
我はなほ蜘蛛手に物を思へどもその八橋は跡だにもなし

(「とはすがたり」)

D) むかし、男ありけり。その男、身をえうなきものと思ひなして、京にはあらず、あづまの方にすむべき国もとめにとてゆきけり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道しれる人もなくて、まどひいきけり。三河の国八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つにわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげにおりて、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばた、といふ五文字を句のかみにすまて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。
からかきつばたにしましあればはるるさぬるたびをしぞ思ふ
とよめりければ、みな人、かれいひの上に涙おとしてほとひにけり。

(「伊勢物語」)

E) 恋せんとされる三河の八橋の蜘蛛手に物を思ふ頃かな

(古今和歌六帖)

(注) ○九献：酒のこと。

○小折敷：食器などを載せるのに用いる小さな角盆。

問三 傍線部A「身のたくひにおぼえて目とまる」とあるが、どういうことか。文脈に即して簡潔に説明せよ。

.....

問四 傍線部B「思ひ立つ心」とは、何を思い立つことを言っているのか、一〇字以内で答えよ。(句読点は不要)

.....

問六 傍線部6「身のたくひにおぼえて」とは、ここではどういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a とても辛い身の上だと思われて
- b 同郷の人のように思われて
- c まれな身の上の人だと思われて
- d 自分と同じ境遇のように思われて

問八 二重傍線部X「思ひ立つ」とY「富士の嶺は」の贈答歌の説明として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 旅立ちを決意した歌を聞かれ、富士山の煙を見たいという思いからであると答えた。
- b 遊女になろうと思ひ立つた理由を聞かれ、許されない恋に落ちたからだと答えた。
- c どのような理由や心境で出家を決意したのかを聞かれ、恋が原因であると答えた。
- d 琵琶を弾こうとしたのはなぜかと聞かれ、恋の苦しみを紛らわすためだと答えた。